

えんどう
遠藤

さぶろう
三郎

元陸軍中将・平和運動家

1893(明治26年)～1984(昭和59年) 91歳没

1. 狭山市とのかかわり

山形県小松町、呉服商遠藤金吾の三男として生まれる。陸軍士官学校を卒業後、29才で陸軍大学校を優等で卒業。参謀本部作戦課勤務からフランス駐在武官へ、エリート軍人の階段を駆け上がっていく。日本が火だるまになっていく時代、遠藤は常にその渦中にいた。

戦後、埼玉県入間郡入間川町(現在の狭山市)の陸軍航空士官学校跡地に入植、農業に従事した。



2. 経歴

①軍人

生来、性格がやさしく、しかも強いものには屈服しない不屈の精神をもつ遠藤は、常に自分の意見を持って上司と渡りあい、そのために一時は左遷される憂き目にも遭遇した。陸軍少将に進級後、ノモンハン事件直後の関東軍参謀副長として派遣されたが、遠藤はその被害の大きさから、現在の関東軍ではソ連軍に対抗できないと悟って、北進論よりも満州防衛を優先するように主張して戦略爆撃の中止を主張した。

②平和主義者へ



1945年8月15日の敗戦で日本軍が武装解除されると、組織に属さない自由人として生きる道を選んだ。軍刀を鋏(くわ)に持ちかえ開拓農民となり、埼玉県入間郡入間川町の旧航空士官学校跡地で家族とともに農業生活にはいった。「貧乏生活にも楽しい日々」と、そのころの暮らしをつづっている。自分が陸軍の指導者の一人として戦ったあの戦争の愚かさを反省し、不屈の闘志をもって非武装平和運動に邁進した。昭和59年死去するまで戦争放棄、平和憲法を訴え続けた。

石碑 「軍備全廃を訴え続けた元陸軍中将 遠藤 三郎茲(ここ)に眠る」 遠藤家自宅

3. 特筆 ～遠藤日誌～

遠藤三郎は生涯にわたり膨大な「日誌」を書き残した。これは1904(明治37)年8月1日から、最後の日付1984(昭和59)年9月9日まで一日も欠かさず93冊に及び、「極秘」のスタンプが押された軍事機密書類も数十点含まれる、日本近現代史の貴重な一次資料である。遠藤が陸軍の将軍から、平和運動の闘士に変貌していった理由もこの膨大な日記と多数の書簡の中に克明に記録している。「遠藤日誌」の原本は現在埼玉県狭山市の遠藤家の遺族から狭山市立博物館に一括して寄託され、研究者の閲覧は可能である。